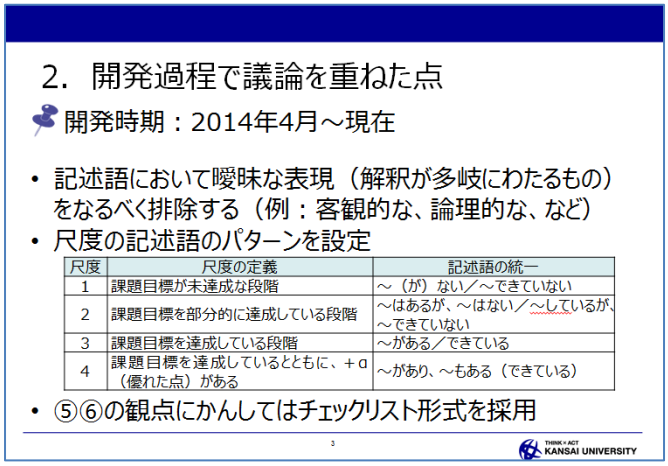
関西大学事例紹介

毛利 美穂（関西大学教育推進部特任助教）

本日はまず、開発体制についてご紹介いたします。資料別添のルーブリックをご覧になりながらお聞きいただければと存じます。

まずは、ルーブリックとは何か。学生の学修成果を可視化することができる評価ツールをさします。これを関西大学で開発いたしました。支援体制・開発の人数は 5 名、そして、以下の教員が関わっております。

ルーブリックの開発は 2014 年 4 月から始まり、今も開発中でございます。このルーブリックの開発過程で議論を重ねた点についてご紹介させていただきます。主にこの三つに分けられるかなと思います。



尺度	尺度の定義	記述語の統一
1	課題目標が未達成な段階	～（が）ない／～できていない
2	課題目標を部分的に達成している段階	～はあるが、～はない／～しているが、～できていない
3	課題目標を達成している段階	～がある／できている
4	課題目標を達成しているとともに、＋α（優れた点）がある	～があり、～もある（できている）

まず、記述語において「曖昧な表現をなるべく排除する」というものです。ルーブリックを見ていただきますと若干は残っておりますが、例えば、教員の評価の①の 3 などにございますような、「おおむね」って何だろうというふうな突っ込みがあるかと思います。たとえば、「客観的」「論理的」とか、最初はこのような用語が非常に多かったのですが、こうした抽象度が高い言葉をなるべく排除いたしました。なぜならば、何をもって「客観的」と言えるのか、何をもって「論理的」と言えるのか、そこが具体的でないと少々使いづらかったことがございまして、このような曖昧な表現につきましてはなるべく排除いたしました。

続きまして、「尺度の記述語のパターンの設定」です。まず、4 尺度を定義いたしまして、記述語のほうも統一を図ったほうが効率的であるということと、今後、ルーブリックを作っていくに当たって、このようなパターンがあったほうが作りやすいということで、このようなパターンを設定させていただきました。記述語の統一といたしまして、たとえば、尺度 1 のほうは「〇〇がない」、「〇〇ができていない」、このような形でパターン化をいたしました。

最後に、ルーブリックの観点の⑤学術的な作法と、⑥日本語の表現ですが、こちらのほうは今回チェックリスト形式を採用しております。実は、もともとこちらの⑤、⑥は上の①、②、③、④と同じような記述方法をしておりましたが、⑥の日本語の表現の 1 の「誤字脱字がない」につきましても、誤字脱字がなければ、尺度 1 から 4 のどこに当てはまるのかなど、やはりいろいろと問題が出てきました。そのままではちょっと判定しづらいということがございましたので、⑤と⑥の観点に関しましては、チェックリスト形式にいた

しました。

このような議論を重ねた結果、今、皆さまのお手元にございます、このライティング・ルーブリックが完成いたしました。

文部科学省平成 24 年度大学間連携共同教育推進授業（考え、表現し、発信する力）を培うライティング／キャリア支援
シンポジウム「大学教育における「書く力」どう測る どう伸ばす――ルーブリックの活用と課題――」関西大学事例紹介　　©関西大学ライティングラボ

ライティング・ルーブリック（論証型レポート、2000 字程度用）

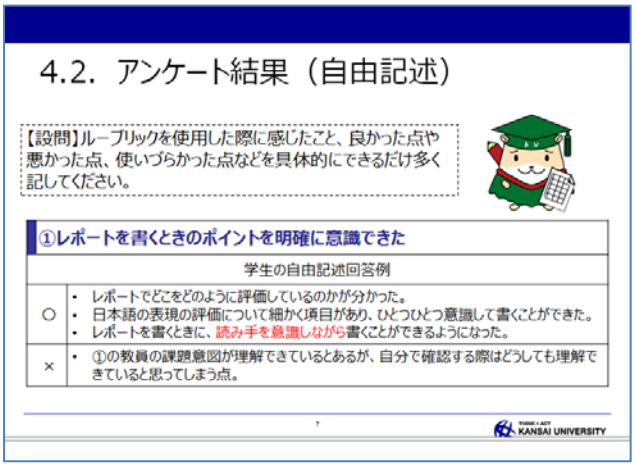
評価の観点	評価の観点の説明	1	2	3	4
① 教員の課題意図の理解	教員の課題意図を理解し、それに沿った記述内容になっているか。	課題意図を理解できておらず、レポートの記述内容が課題に沿っていない。	課題意図を理解しているようだが、レポートの記述内容が課題の要件を満たしていない個所がある。	課題意図を理解しており、レポートの記述内容が課題の要件をおおむね満たしている。	課題意図を十分に理解しており、レポートの記述内容が課題の要件を過不足なく満たしている。
② 資料の取り扱い	資料に関して、その内容を適切に把握し、十分な検討をしてまとめられているか。	資料に関しての記述がない。	資料に関する記述はあるが、その内容を把握できておらず、まとめられていない。	資料に関して、その内容が把握できており、まとめられている。	資料に関して、その内容が把握できており、論に沿ってまとめられている。
③ 自分の立場・意見	自分の立場や意見が、説得力のある論拠とともに、明確に提示されているか。	自分の立場・意見が提示されていない。	自分の立場・意見は提示しているが、その論拠が明らかでない。	自分の立場・意見が、論拠とともに提示できている。	自分の立場・意見が、論拠とともに提示できており、かつオリジナリティがある。
④ 全体の構成	文章全体の構成について、序論・本論・結論、PREP 等の形式になっているかどうか。	序論・本論・結論、PREP 等に沿った構成ができていない。	序論・本論・結論、PREP 等に沿った記述はみられるが、形式的に欠けている部分がある。	序論・本論・結論、PREP 等に沿った構成が形式的にできている。	序論・本論・結論、PREP 等に沿った構成が形式的にできており、かつ内容的にも一貫している。
⑤ 学術的な作法	用語の定義、引用のルールなど、学術的な文章として適切な作法が守られているか。	満たしている項目が、1 項目以下である。	満たしている項目が、2～3 項目である。	満たしている項目が、4 項目である。	満たしている項目が、5 項目である。
⑥ 日本語の表現	日本語の文章として、表現・表記が適切であるか。	満たしている項目が、2 項目以下である。	満たしている項目が、3～5 項目である。	満たしている項目が、6～8 項目である。	満たしている項目が、9 項目以上である。

⑤学術的な作法
1. 表題、所属（学籍番号、学部、学年等）、氏名の基本的な情報が記されている。
2. 出典を明示しており、自分の意見と他者の意見を区別している。
3. 本文中の引用方法について、ルールに従って表記されている。
4. 巻末の文献表があり、分野ごとのルールに沿って表記されている。
5. 専門用語の定義付けや使い方が適切である。

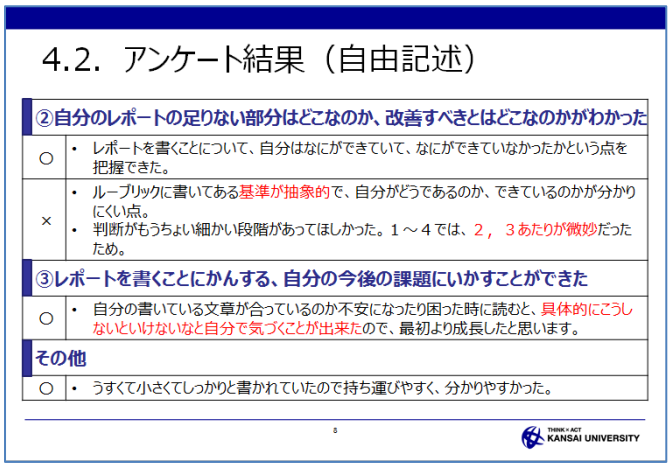
⑥日本語の表現
1. 誤字脱字がない。
2. 文法の間違いがない。
3. 一文の長さが適切である。
4. 文体が統一されている。
5. 主語・述語が呼応している。
6. 句読点の使い方が適切である。
7. 段落の作り方（一字下げ、行替え、長さ）が適切である。
8. 重複表現（接続詞、文末）がない。
9. 論文では避けたい表現（隠語、俗語、口語表現）がない。
10. ページのレイアウト（行数・文字数、余白、ページ数の付与）が適切である。

作成したルーブリックに関しましては、実は昨年度の秋学期にモデルクラスで試行的に運用しました。その後、検証をいたしまして、今年度春学期から、複数の授業で使っているという状況でございます。導入したクラスは、初年次生が多い共通教養科目、そして、学部専門科目が中心となっております。その内訳はグラフで示させていただきましたとおり、クラス数としては計 44 クラス。やはり初年次生対象のクラスを中心に導入しましたので、1 年生、2 年生が非常に多いです。もともと、こちらのライティング・ルーブリック自体が初年次生を対象とした、2000 字程度のレポートを対象としておりますので、こちらの意図と合っているかと存じます。

実際に導入いたしまして、アンケートを採らせていただきました。何のためのアンケートとかと申しますと、ルーブリックの今後の改善、改良のための現状把握ということです。時期は、事前アンケートを第 1 回もしくは第 2 回、4 月の段階に行いました。そして、事後アンケートとして 7 月の第 15 回の授業で採らせていただきました。内容としまして、ライティング力とルーブリックの使用についてお聞きしました。



今回、ご紹介する分析結果ですけれども、ルーブリックを中心に、ということで事後アンケートのほうを紹介させていただきます。回収率は 62.2 パーセントで、225 名の分析結果を紹介いたします。設問としましては選択肢を設けております。「この授業の課題でルーブリックを使用した際、下記のそれぞれの項目についてどの程度、そう思いましたか」ということで、①「レポートを書くときのポイントを明確に意識できた」、②「レポートを書くことについて自分には何ができていて、何ができていなかったかっていう点を把握できた」、③として、「レポートを書くことに関する自分の今後の課題に生かすことができた」という点をアンケートで採らせていただきました。3 点とも「当てはまる」、「やや当てはまる」と答えたものが、それぞれ全体の半数以上になっております。ちょっと表では見にくいのですが、実は「全く当てはまらない」はゼロでしたので、ここでは表示していません。



次に自由記述としまして、具体的に使いづらかった点、良かった点を聞きました。先ほどの選択の①から③で分類いたしました。学生の自由記述回答例としましては、表の左欄の「○」「×」は、良かったという点が「○」に、よく分からないという形の答えは「×」に分類いたしました。

①「明確に意識できた」という点は、「読み手を意識しながら書くことができるようになった」という点がございます。そして、下の「×」は例えば、教員の課題意図については、学生自身が評価するのはちょっと難しかったかなというような、アンケート結果が見えてきました。この点に関しましては、後ほど、担当の先生にお伺いいたしまして、これはもしかしたら、学生ではなく、教員のほうが見るべきことだったかなという意見もありました。

②、③はこのような形です。ご紹介したいのは主に②ですね。基準が抽象的であった。例えば、ルーブリックの 2 と 3 の尺度の差が分からなかったという意見がありました。その他、一番下に入れておりますけども、このような意見もございました。薄くて、小さくて、しっかりと書かれていたので持ち運びやすく、わかりやすい、と。ルーブリックを作るときには一枚ものでと思ったのですが、やはり学生も一枚ものであると扱いやすかった

という意見で、一枚ものにして良かったなというのがわれわれの感想でございます。

先生がたにもヒアリングを実施させていただきました。こちらは、事後アンケートの回収の際に行いました。実際にルーブリックを使用して感じた点、問題点や要望などをお聞きしました。5 名の先生がたにお聞きしております。

結果といたしましては大体、このような形ですね。授業で活用する際の注意点としては、やはり評価の観点の意味、尺度の差について、もっと先生のほうから学生に説明をしたほうが良かったという点がございます。例えば、ルーブリック②の「資料の取り扱い」で、資料に関して十分な検討をしているかどうかと聞いておりますが、十分ってどのぐらいが十分なのかというようなことに関して、やはり授業それぞれの先生がたの思いもございます。ルーブリックを使うに当たっては、こういったことを先生がたも説明はされているのですけども、もっとちゃんと、自分はこういう意図でルーブリックを使っているんだよということを言えば良かったなというふうなヒアリングの結果がございます。

あとは、観点と尺度ですが、⑤・⑥に関しましてはチェックリストになっていて良かったと。これは学生たち自身が普段からチェックできるという形で使いやすかったということです。あとは、ちょっとこれはマイナスな点になるかと思うのですけど、各項目と重要度がフラットになっておりまして、実際には重み付けが必要ではなかったかというようなご意見もいただきました。例えば、ルーブリック⑤、学術的な作法の所の 1 をご覧ください。「表題、所属、氏名の基本的な情報が記されている」。先生がたは、「これがなかったらもう駄目だろう」ということで、これを他と同様に 1 として換算するのはどうか、というご意見をいただきました。

あとは、ルーブリックの種類についてのご要望です。今回、論証型レポート用だったのですけども、他のタイプのレポートのルーブリックが欲しいというようなご要望をいただいております。

これらを踏まえまして、今後の課題といたしましては、まずは今回、アンケート、ヒアリングを通していただいた要望をもとに改善していくということ。そして、今回、授業連携をさせていただいたのですけれども、より多くの先生がたに使っていただけるよう改善をいたしまして、また新たなルーブリックを先生がたに使っていただくということが必要ではないかと思っております。そして、もう一つ、新たなルーブリックの作成ですが、要望がございますので、こちらも取り組んでいかなければならないと思います。

実は先ほどから外のブースで、本取組で開発中の TEC システムというものをご紹介させていただいておりますけども、ルーブリックと実はシステムの融合を進めておりまして、システムの中にルーブリックが搭載されております。どういった形でルーブリックをみることができるのかというのは、デモのほうでご覧いただきまして、システム上でのルーブリックの活用の可能性についてご確認いただければと思います。関西大学の発表は以上です。ありがとうございました。